

去年暮れに緑区の造園業のお客様から頂いたシクラメン（左）  
11月に神奈川県寒川町の従妹からもらったミニシクラメン（右）  
どちらもこの冬寒い間中、3カ月以上も咲き続けてくれました。  
葉っぱが黄色くならなかったのは初めて！！ありがとう。満足です。



2012年3月8日、埼玉県庁花時計前のシクラメン。もう春ですね。  
(埼玉県立農業大学校 作品)





去年からずっとこの歌が頭の中をグルグル回っています。

探し物はなんですか 見つけにくいものですか……

まだまだ探す気ですか？それより僕と踊りませんか？ ウフフ～ 一夢の中へー井上陽水

## — 殻の中の老婦人の話 —

その老婦人はいつも下を向いて、無表情だ。

80歳は超えていると思うが、90歳くらいなのかもしれない。

周りの誰とも、交流をしているところを見たことがない。

いつも首を深く垂れ、車椅子に黙って座っている。食事の時間になると、母の前の席に座っている。

母の施設（老健）で、クリスマスに家族一緒に昼食を食べませんか、というイベントお誘いがあり、申込の上出かけていった。

同じ階にはリビングルームが4つあり、それぞれの別箇の単位でテレビを見たり、食事をしたり過ごしている。母といつも一緒に過ごすお仲間は約12名位。その内、昼食会に出席した「家族」は私の他に2名、出席率はあまりよくないようだ。

メインの献立はお寿司。施設の栄養士さんの手作りという事だ。

嚥下障害のある母には、特別メニューの「お粥寿司丼」。

丼にお粥、その上に乗せる具はすべてのみ込みやすいようにミキサーにかけられ、潰され、とろみがつけてある。他の普通食のお寿司と比べても、見た目ではがっかりさせないように、色取り良く作られている。

「きれいね」と言うと、母も頷いて、早速スプーンでまぐろの中落ち丼をパクパク食べ始めた。刻み海苔も細くて飲込みやすそうだ。

付け合せの茶わん蒸しも緑の野菜のトッピングが裏ごしされている。

デザートはマスクメロン、母の分は淡い薄緑色の本物のマスクメロンゼリーだ。近頃母は、ここの生活に慣れて落ち着いてきたせいか、貴女も一緒に食べましょう、とこちらを気遣うようになった。

いつもなら「私はお腹空いていないよ、母様だけで食べて」、と答えるのだが、今日は一緒に料理が並んでいる。

何だか母は嬉しそうだ。

前の席に座ったいつもの老婦人は、メニューが又別で、太巻きずしを食べている。手づかみで食べられるので、丁寧につまみながら、黙々と食べている。

「私にも…」婦人がふと私に何か言った。えっと聞き返すと、

「私も娘がいるんですがね、さっきあそこの……」……。

さっき、の先の言葉はよく聞き取れず、下を向いてもう話したい事はないわ、と言っているような感じがした。

「そうですか。娘さんがいらっしゃるんですね？」と声をかけてみたが、もう、彼女は自分だけの世界に戻ってしまった。

几帳面な性格らしく、食べ終えた数枚のお皿をさっきから積み重ねようと何度も試みている。元からプラスチックの一体化したランチ皿と、形の違うお皿数枚を重ねる事が無理なのだが、何度も何度も繰り返している。介護士さんが、〇〇さん、それ、片付けなくていいですよ、と声をかける。

そのうち7分目ほどジュースの入ったコップをその上に更に乗せようとするので、「ああ、こぼれる！！」、向かいの席から腰を浮かせた。

〇〇さん、ジュースは折角だからゆっくり飲みましょう。今、他のお皿は片付けますから、ジュースはそこに残して置いておいて下さい。介護士さんも又、カウンターの向こうから声をかける。

今まで黙々と片付けていた老婦人が下を向いたまま、怒ったように口を開いた。

「いいえ。これも下げて下さい。要りません。私飲みませんよ。こんな胃に刺激の強いもの！身体に悪いです。」

100%ジュースが刺激が強い、身体に悪い……。確かにそんな気もしないではない。私はちょっと感心した。

間を入れず、次に彼女はきっぱりと言った。「コーヒーを下さい！」

フッ・と私は笑ってしまった。今まで口を聞く様子の無かった人が、こんな刺激の強いものは体に悪い、と言い、その次にコーヒーを、と言ったのが可笑しかった。

しかし、その後すぐ、老婦人は私にまっすぐに顔を向けた。

「貴女、今お笑いになりましたよね、わたくしの事を。人を見下して、なんて

下品な。人を笑いものにするなんて。わたくし、許せないですわ。ちゃーんとわたくし、見ておりましたの。今貴女がお笑いになったのを」  
理路整然、言葉は丁寧でくずれない。彼女は怒りに震え、私の眼を見据えている。

《イヤア、別にさほどの悪気はないつもりですが》、とか《奥様、笑ったなんてとんでもない、誤解でございますよ》とか心のなかではいくつか浮かんだものの、結局どれもふさわしい言い方とは思えず、言葉を呑み込んでしまった。黙った私に、老婦人は、同じ言葉を繰り返した。下品です。ゆるしません。他人を笑いものにするなんて。

「ご馳走様でございました。大変おしゅうございました。お世話になりました。ありがとうございます」介護士さんに丁寧に何度もお礼を述べた後、彼女は又、首をうずめて元の沈黙の世界に戻ってしまった。  
もう、誰の声も聞いていない。

どんな人生を送っていた人なんだろう、ふと考える。

「物」であれば、判断力が衰えない内に、納まり所を決めておくことは可能だ。しかし、目に見えない、それぞれの心の奥底にしまっているものは、すべて、死ぬ時に自分と一緒に持っていくのだ。  
持っている心のお荷物を、どんどん軽くしていくのが、老化であり、年をとれば都合の悪い事は忘れていくものだ、という考えは、甘いのもかもしれない。

あれ以来、何か気がかりで、フロアーを探してしまう。  
陽水さんの歌も、エンドレスで頭の中を回っている。

**探し物はなんですか 見つけないものですか……**

**探すのをやめたとき、見つかることもよくある話で……**

**探し物はなんですか まだまだ探す気ですか**

**それより僕と隔りませんか？ ウフフ～**

—夢の中へ—